

今日あるのは日巻さんのお陰です」と、言つてもらっています。これも有り難いことです。

退職後は民生委員を四期十二年勤めました。ほかに請われるままに校区消防分団やら蜜柑、すもも、ネーブル等の果樹栽培の組合の役職を勤め、先達的な役割を果たしてきました。

蜜柑一本で米一俵分の値段で、蜜柑、果樹はウハウハの時代、金にならず捨てた時もありました。現在は長男夫婦が後継者としてイチゴを栽培し、イチゴの認定農業者として頑張っています。

今は夫婦健康で悠々自適、行政の福祉、高齢者への行き届いた思いやりに甘え、平穏な日々を感じながら過しています。波乱の九十余年を思うとき平和の尊さ有り難さがしみじみと感じられます。

## 戦傷にもひるまず

宮城県 高橋清喜

歓呼の声と熱気に包まれ、地元の飯野川尋常高等小学校の校庭において、出征する十一人の壮行会を開催して頂き、町長さんをはじめ町の有力者の方々の激励と祝辞に応えて、「皇国のために身命を捧げて来ます」と無我夢中で覚悟のほどを披瀝し、後顧の憂いもなく、住み慣れた故郷に別れを告げた、あの日あの時の感激が今でも脳裡に焼き付いています。

私の家は父母と男兄弟四人、私はその末っ子として大正十一（一九二二）年一月十二日、生を享け、皆から可愛がられ、世間の痛みも苦しみも知らず、家族の愛情の中で育ちました。長兄は満州と南方に、次兄は北支において戦死、三兄はビルマにと、北から南の戦場にて活躍した軍人一家を誇りにしております。六十余年の歳月が過ぎ、記

憶もおぼろげですが、前後をたどりながらお話しします。

青年学校時代は成績優良で、衆の範なりと県知事賞を受賞し、また紀元二六〇〇年の式典に当たっては青年学校代表として、皇居前広場において天皇陛下の御親閲の分列行進に参加するという栄誉に浴しました。

昭和十七（一九四二）年の徴兵検査には家名を汚さぬ甲種合格となり、胸を張って帰宅することが出来ました。いよいよ同年十二月一日に「東部第二十二部隊に入隊すべし」との令書がきました。親族、親戚はじめ多くの方々の見送りを受け、鹿又駅より列車にて一路仙台に出発、住み慣れた故郷の山河を後にしたのです。

入隊後、慌ただしい毎日で、十一日目には仙台駅より列車にて出発しましたが、途中列車の窓は閉めきられて下関港に到着、直ちに輸送船にて玄界灘の波に揺られました。甲板に出て再び見ることの出来ない祖国に別れを告げ、間もなく釜山港

に上陸しました。そして山海関經由で列車は窓を閉めきられたまま一路中支に向かい、目的地だった荊門県に到着、一月十日、歩兵第一〇四連隊第八中隊に編入されました。

この教育隊にあつては軽機班に所属し、訓練を終了して間もなく、山岳地帯を警備していた第十二中隊の先兵が敵襲を受けているとの情報があり、六月四日応援に出陣しました。

「中隊は黎明攻撃の作戦で対応すべし」との命令がありました。軽機による威嚇射撃を仕掛けますと敵は一斉攻撃に出てきて、五十メートルぐらゐのところに陣地を構築していた友軍が包囲され、激戦となりました。

私は軽機の射手をしていたので敵から狙い撃ちに合い、右肩より肩甲骨を、そして暖かいので脱いで背負っていた鉄兜の真中を敵弾が貫通し、背中を血が滴り落ちるのを感じました。

十人ほどの戦友に付き添われ、担架に乗れと言われましたが、千仞の谷底のような急斜面を見た

ら、その気になれず、何とか歩き通して朝六時、荊門県の第十三師団野戦病院にたどり着きました。

ここで三カ月ほど入院、さらにそこから五時間ほど行った所にある温泉での療養三週間ほど、その後漢口第一陸軍野戦病院に転院となりました。

九月四日、長かった入院生活より解放され、原隊に復帰となった時は飛び上るほど嬉しかったものです。そして入院生活が長かったので一選抜の上等兵にはなれないだろうと諦めていますと、十月一日付けで上等兵に進級しました。「無理をしてはいけないぞ」と初年兵当時の教官だった中隊長から温かい言葉を掛けて頂き、その温情は有難く心にしみました。

昭和二十年八月一日、初年兵を原隊に引き渡し、常德作戦に参加しました。途中、食糧調達のため曹長が長となり、歩哨を立てつつ部落に入りましたがが発見され、不成功に終わりました。

その後、湘桂作戦に参加するため追及の途中、一個分隊が敵に包囲されているので急援を頼まれ、

二個分隊で川に面した方向を逃げ場に仕立てて、一斉攻撃をしますと、敵は作戦通りに川に逃げ込み、その退路を目掛けての攻撃で敵を殲滅せんめつしました。

そして程なく反転作戦の原隊と合流しましたが、背の傷跡の痛みの我慢も限度に達し、終戦の八月末、武昌大学の跡地に出来た仮設野戦病院に名目の転属となりました。

ここには九月上旬までに二千人ほどが収容されました。ここでは中国に対する「お詫び状」なる物に、一人一人署名することとなり、五、六人の代筆をしました。

間もなく上海陸軍野戦病院に転院となり、十月十五日に退院と同時に、第六十一師団迫撃砲隊に転属となり、復員の日が待ち遠しい毎日となりました。ようやく内地帰還の命令が出ました。

昭和二十一年四月七日、上海港を出航、四月十日、佐世保に上陸、各種の消毒や検疫などがありました。健康状態良好にて、復員式後には解散と

なり復員列車に身を任せることとなりました。途中車中から原爆投下の広島や空爆にあった街など、生々しい戦争の傷跡を眺め、再びこのような悲惨な目に子孫は経験させたくないとい心に誓ったものです。

故郷の山河を見ることも、家族とも再会出来ないと覚悟して出征した思いが、再会することが出来て、この上ない幸を満喫しました。

そして祖国復興の決意を新たにし、戦中に受けし公傷は癒えず、傷害者として認められず、心を悩ましておりましたところ、田園を挟んで三キロほどの向かい部落の同姓の家から婿養子の話が持ちかけられたのです。お互いに知りつくしていたので諸手を上げての縁談が成立したのです。

私の戦傷に対する家族からの理解もあり、今では孫にも恵まれ幸せな家族の中にあつて老後を満喫しておりますが、やはり生命あつてのものだと感謝しております。

## 中支数百キロの夜間行軍

東京都 西岡 信治

昭和六（一九三一）年九月十八日、満州事変が勃発してより僅か一年で満州国は独立し新国家が建設されました。日本政府は王道楽土として宣伝し、満州への移民を奨励しました。そして全国の農業者に新天地として開拓を奨め、全国各地より開拓団として北満州へ続々と進出して行きました。また少年義勇軍として若人達が茨城県の内原訓練所で教育を受け、開拓義勇軍として北満州の開拓に従事しました。当時の若者にとっては満州の新天地は憧れの的でもあり、必然中学校の修学旅行もこの遠い満州を選ぶ中学校も増加して来ました。

私は昭和十五年三月、滋賀県立水口中学校を卒業しました。修学旅行は満州と決定していましたが、今年より中止となり残念に思いました。それ